

文化財に関する調査研究成果および研究情報の共有に関する総合的研究(シ01)

目的 国内外の諸機関との連携を見据え、当研究所の文化財に関する調査研究の成果・データをより国際的標準に見合うかたちに整え、効果的に共有してゆくための研究を行う。あわせて地方公共団体と文化財に関する情報の提供と共有を行うことを視野に入れる。

成果

1. アート・ドキュメンテーション学会美術館図書室SIG (Special Interest Group) と当研究所との共催で5月14日にセミナー室において研究会「アート・アーカイブの今」を開催した。
2. 当研究所刊行の論文をJapanese Institutional Repositories Online (JAIRO) へ掲載することを實現し、結果、国立国会図書館のNDLサーチ、国立情報学研究所のCiNii Articleでも論文をフルテキストで参照できることとなった。
3. 文化財関連文献情報のデータ群の世界発信に向けて欧米で広く使われる学術情報データベース「OCLC」へ提供するべく協議を重ねた。
4. 6月27日に国立西洋美術館との「文化財情報の海外発信にかかわる基盤形成事業実施にかかわる覚書」を締結した。
5. 11月30日にJALプロジェクトの一環として日本に招へいされた海外日本美術史料専門家(司書)との意見交換会を行った。
6. 12月に奈良国立博物館・東京文化財研究所編『国宝 絹本著色 十一面観音像』(2016(平成28)年3月)に基づいてデジタルコンテンツ化し、Web上での公開を行った。
7. 2月13～18日に、イギリス・セインズベリー日本藝術研究所と日本美術及び同研究に関する英語文献・記事情報の採録についての運用面での協議を現地で行った。
8. アメリカ・ゲッティ研究所への図書及び文献情報の提供に向けての協議を重ね、3月19～24日に現地で本年度の確認協議を行った。

発表・橘川英規：「東京文化財研究所における文化財に関する専門的アーカイブの拡充ー『日本美術年鑑』のコンテンツを国際的学術基盤へー」EAJRS(日本資料専門家欧州協会)ルーマニア・ブカレスト大学 16.9.15

・津田徹英：“On some characteristics of Japanese traditional portraits known as *Nise-e* (likeness picture)”イギリス・セインズベリー日本藝術研究所 17.2.16

研究組織 ○津田徹英、佐野千絵、皿井舞、安永拓世、橘川英規、二神葉子、小林公治、塩谷純、小林達朗、城野誠治、福永八朗(以上、文化財情報資料部)、久保田裕道(無形文化遺産部、文化財情報資料部兼務)、吉田直人(保存科学研究センター、文化財情報資料部兼務)、津村宏臣(客員研究員)

日本東洋美術史の資料学的研究(シ02)

目的 近世以前の日本を含む東アジア地域における美術作品を対象として、基礎的な調査研究を行い、研究の基盤となる資料の整備を行う。あわせて、これにかかる国内外の研究交流を推進する。

- 成果**
1. 逸翁美術館蔵白梅図屏風について調査を行った。
 2. 東京国立博物館蔵准胝観音像等の調査を実施した(2017(平成29)年2月23日)。
 3. 美術史研究のためのコンテンツ(日本絵画史年記資料集成)を作成するため平成11年以降の展覧会図録から年記のある作品の資料を順次収集し、入力を行った。
 4. 『記事珠』公開に向けてのパイロット版を作成するため、解説、註の作成を第2巻以降について行った。
 5. 本プロジェクトに関する研究会を行った(下記参照)。
 6. 東京国立博物館と実施してきた仏教絵画の共同研究を仏教美術全般に広げ、高精細画像の取得から光学調査全般を実施する体制に変更した。



「日本絵画史年記資料集成」
ウェブページ

論文・増記隆介：「十世紀の画師たち—東アジア絵画史から見た「和様化」の諸相」『美術研究』420 pp.1-30 16.12

・江村知子：「光琳の「道崇」印作品について—尾形光琳の江戸滞在と画風転換」『美術研究』421 pp.1-20 17.3

・安永拓世：「展覧会評 我が名は鶴亭」『美術研究』421 pp.21-30 17.3

発表・西木政統：「滋賀・鶏足寺七仏薬師如来像の造像をめぐる一考察」文化財情報資料部研究会 16.5.31

・津田徹英：「詞書の筆跡からみた遊行上人縁起絵—伝世諸本の位相—」文化財情報資料部研究会「遊行上人の位相」 17.3.28

刊行物・奈良国立博物館・東京文化財研究所編：『法華山一乗寺蔵 国宝 聖徳太子及天台高僧像光学調査報告書—カラー画像編』 16.4

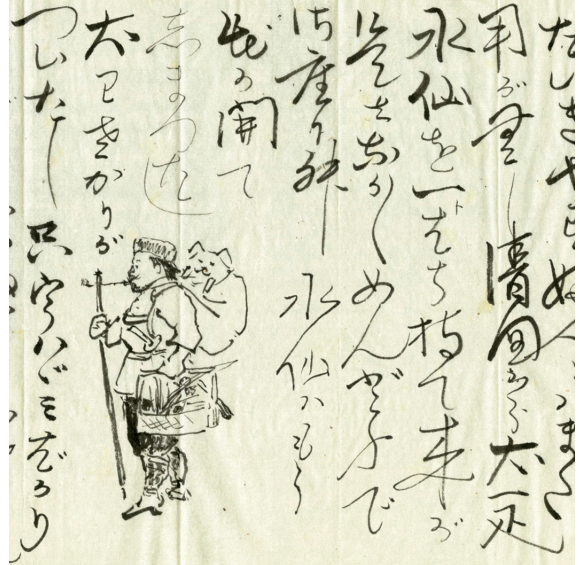
・奈良国立博物館・東京文化財研究所編：『法華山一乗寺蔵 国宝 聖徳太子及天台高僧像光学調査報告書』 17.3

研究組織 ○小林達朗、佐野千絵、二神葉子、小林公治、塩谷純、皿井舞、安永拓世(以上、文化財情報資料部)、近松鴻二、中野照男(以上、客員研究員)

近・現代美術に関する調査研究と資料集成(シ03)

目的 近・現代美術を対象として日本における展開を軸としつつ、その方向づけに大きく関わった欧米の動向も視野に入れて分析・考察する。あわせて、作家や関係者、及び美術館等の諸機関が所蔵する資料の調査を行い、得られた情報を近・現代美術研究の基礎資料として整備する。

成果 1. 当研究所が所蔵する黒田清輝宛書簡について、3度の部内研究会を開き(五姓田義松書簡:2016(平成28)年4月21日、黒田貞子書簡:2016(平成28)年8月30日、山本芳翠書簡:2016(平成28)年12月8日)、また岡田三郎助からの書簡の翻刻を『美術研究』420号に掲載した。



『明治28年4月5日付、黒田清輝宛山本芳翠書簡』より
日清戦争への従軍後、清国から犬一匹と水仙一鉢を持ち帰った
山本芳翠自身の姿が描かれている。

2. 谷文晁の画風を近代に伝えた佐竹永海・永湖・永陵についての作品調査を都内で行い(2016(平成28)年8月4日)、松戸市戸定歴史館で開催された「松戸神社神楽殿の絵画と修復展」(2017(平成29)年1月21日~3月5日)の図録と講演会(2017(平成29)年2月5日)でその成果を公表した。
3. 大正期の女流美人画家、栗原玉葉に関する2度の部内研究会を開き(2016(平成28)年6月28日、2017(平成29)年1月12日)、その詳細な評伝を『美術研究』420号に掲載。また玉葉の代表作である《朝妻桜》(大正7年作)について、美術史学会東支部例会で研究発表を行った(2017(平成29)年1月28日)。
4. コンセプトチュアルな作品とパフォーマンスで知られる現代美術家の松澤宥に関する資料調査を、活動の拠点であった下諏訪で行い(2016(平成28)年10月15~16日)、そのアーカイブ構築に向けて研究協議会を開催した(2017(平成29)年3月14日)。
5. 黒田清輝と親交が深く、制作と並行して美術雑誌等で西洋美術の紹介に努めた画家、久米桂一郎の関連資料について共同研究を実施すべく久米美術館と覚書を交わし、資料のデジタル化に着手した。

- 論文**・田所泰:「栗原玉葉に関する基礎研究」『美術研究』420 pp.31-68 16.12
・塩谷純:「佐竹永湖一文晁派の伝道者として」『明治21年の佐竹永湖とその周辺 松戸神社神楽殿の絵画と修復展』図録 pp.8-13 17.1
- 発表**・山梨絵美子:「生誕150年黒田清輝とその時代」北区赤羽会館講演会 16.9.27
・山梨絵美子:「黒田清輝と五味清吉」岩手県立美術館講演会 17.1.14
・田所泰:「栗原玉葉の《朝妻桜》に関する考察」美術史学会東支部例会 17.1.28

研究組織 ○塩谷純、橘川英規、城野誠治、田所泰(以上、文化財情報資料部)、山梨絵美子(副所長)、三上豊、丸川雄三、河合大介、田中淳(以上、客員研究員)

美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開(シ04)

目 的 絵画や彫刻、工芸といった美術作品は、その表現のあり方、制作に用いられた技術、そして利用された素材などが複合し一体となって成立したものである。本プロジェクトでは、こうしたそれぞれの構成要素がどのような実態を持ち、またどのように関わりあっているのか、関連する諸分野を広く渉猟しつつ多視点的に分析し、その関係の解明を目指すものである。こうした研究の実施により、美術「作品」に対するより深い理解の醸成が期待される。

成 果

1. 漆器類に関わる研究
 - ・5月10・11日に大分県津久見市、県立歴史博物館、大分市歴史資料館所蔵南蛮漆器の調査及び意見交換を実施した。
 - ・南蛮文化館と共同研究の覚書を取り交わし、所蔵漆器類の調査研究を行うとともに、同館所蔵品の修復について指導助言を行った。
 - ・5月19日、東慶寺蔵南蛮漆器聖餅箱を東京国立博物館撮影CT画像による樹種及び年輪年代の検討作業を実施した。
 - ・3月4・5日に当研究所にて公開研究会「南蛮漆器の多源性を探る」を開催した。発表者は国内9名・海外2名の合計11名であった。江戸時代初期を中心とした南蛮漆器の持つ多源的性格の検討、桃山時代ポルトガル人による工芸関連史料検討、同時代の琉球漆工史、南蛮漆器の炭素年代測定結果、南蛮漆器使用漆の有機化学分析結果、東アジア産南蛮漆器漆のストロンチウム同位体分析、南蛮漆器使用木材の樹種同定、螺鈿に使われた貝種分析、桃山時代の「鮫皮」利用史、装飾金具編年の検討、南蛮漆器類似のポルトガル・アジア様式調度の歴史と素材・技術分析などで、人文学から自然科学までの多岐にわたる未知の分析結果多数が報告・討議され、登壇者以外に海外からの渡航参加者13名、国内参加者約90名弱を得た。
2. 研究成果公開
 - ・当研究所が所蔵するガラス乾板のデジタルデータ化に、文字情報を補訂の上、ウェブへのアップロード作業を継続的に実施した。
 - ・6月11日の宝石学会、同月26日の文化財保存修復学会で、真珠科学研究所との共同研究の中間報告を口頭発表した。
 - ・2月24日部内研究会にて甲賀市水口藤栄神社蔵十字形洋剣の調査研究結果について共同研究者5名による成果発表を行った。

報 告・矢崎純子、小林公治ほか：「螺鈿に使われる貝殻の分析—主にヤコウガイ、アワビについて」『平成28年度宝石学会(日本)講演会・総会プログラム』p.19 16.6

・矢崎純子、小林公治ほか：「螺鈿に使われる貝殻の構造的特徴—ヤコウガイ、アワビについて」『文化財保存修復学会第38回大会研究発表要旨集』pp.54-55 16.6

発 表・小林公治：「慶長期後半から寛永期前半にかけて流行した漆器文様・技法—絵画資料と伝世漆器との対話—」文化財情報資料部研究会 16.10.25 ほかに18件

・小林公治：「藤栄神社に伝わる十字形洋剣(レイピア)の实在性と年代の検討—博物館コレクション・出土資料・絵画資料による予察—」文化財情報資料部研究会 17.2.24 ほかに18件

刊行物・『公開研究会予稿集 南蛮漆器の多源性を探る』17.3

研究組織 ○小林公治、佐野千絵、小林達朗、二神葉子、塩谷純、津田徹英、皿井舞、安永拓世、橘川英規、田所泰(以上、文化財情報資料部)、江村知子(文化遺産国際協力センター)、中野照男、田中淳(以上、客員研究員)

無形文化財の保存・継承に関する調査研究(Δ01)

目 的 我が国の無形文化財、並びに文化財保存技術の伝承形態を把握し、その保護に資するため、伝承の基礎となる技法・技術の実態や変遷の調査研究、及び資料の収集を行い、現状記録の必要な対象を精査して記録作成を行う。

- 成 果**
1. 無形文化財に関する調査研究
 - ア) 人形浄瑠璃文楽で用いられる義太夫節浄瑠璃に関する調査研究
 - イ) 日本の伝統楽器とその製作技術に関する調査研究
 - ウ) 染織材料(麻および絹)に関する調査研究
 2. 現状記録を要する無形文化遺産の記録作成
 - ア) 講談：連続口演の機会が激減している講談の実演記録を作成(一龍斎貞水師8席・神田松鯉師6席)
 - イ) 落語：伝承が危ぶまれている正本芝居噺の実演記録を作成(林家正雀師2席)
 3. 研究調査に基づく成果の公表
 - ア) 第11回無形文化遺産部公開学術講座「麻のきもの 絹のきもの」(共催・文化学園服飾博物館)の開催
 - イ) 無形文化遺産の伝承に関する研究会Ⅲ「現在に伝わる明治の超絶技巧」(共催・泉屋博古館)の開催

- 論 文**・飯島満：「七世豊沢広助『義太夫 節と手順』『無形文化遺産部研究報告』11 pp.17-37 17.3
- 報 告**・山崎剛・鈴田由紀夫・原田一敏・長崎巖・荒川正明(編集構成：菊池理予)：「無形文化遺産(伝統技術)の伝承に関する研究会Ⅲ「現在に伝わる明治の超絶技巧」セッション「『明治工芸』を現代に活かす」『無形文化遺産部研究報告』11 pp.125-139 17.3
- 発 表**・菊池理予：「文化財保護における 麻のきもの・絹のきもの」第11回東京文化財研究所無形文化遺産部公開学術講座 文化クイントサロン 17.1.18
- ・飯島満：「伝統芸能を伝えるカー人形浄瑠璃文楽を事例に一」アジア太平洋無形文化遺産研究センター『無形文化遺産国際シンポジウム一技と心を受け継ぐ一』 サンスクエア堺 17.11.19

研究組織 ○飯島満、前原恵美、菊池理予、佐野真規(以上、無形文化遺産部)、早川典子(保存科学研究センター)、星野厚子(客員研究員)

無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究(Δ02)

目 的 風俗慣習、民俗芸能、民俗技術等無形民俗文化財のうち、近年の変容の著しいものを中心に、その実態を把握するために資料収集と現地調査を行う。また、無形民俗文化財研究協議会を実施し、その成果を報告書にまとめる。さらに、これまで東京文化財研究所で収集・保管している無形民俗文化財についての記録・資料の整理を行う。また選定保存技術については、国により選定された技術および未選定の技術について情報を収集し、そのなかで重要なものについては現地調査・記録作成を行う。

- 成 果**
1. 風俗慣習の調査として樹木祭祀や正月儀礼等について、民俗芸能の調査としてシシ系芸能や神楽について、民俗技術の調査として箕の製作技術や鵜飼漁の技術等について、伝承や保護の実態についての現地調査や資料収集を行い、現状把握とともに現地関係者とのネットワークを構築した。
 2. 東日本大震災被災地における民俗芸能、風俗慣習の調査として、浪江町の苅宿鹿舞、宮城県女川町の祭礼及び獅子舞等に関して調査を行い、資料収集・記録保存を行った。また無形文化遺産アーカイブスの開発とデータ収集を行い、「311復興支援 無形文化遺産アーカイブス」に続き、全国版の整備を進めた。
 3. 第11回無形民俗文化財研究協議会を「無形文化遺産と防災一リスクマネジメントと復興サポート」をテーマに東京文化財研究所において開催し、124名の参加を得た。4件の事例報告をもとにコメンテーター2名を含めた総合討議を行った。成果は『第11回無形民俗文化財研究協議会報告書』にまとめた。
 4. 選定保存技術については、未選定の文化財の保存技術の調査として、友禅の下絵に用いる染料である青花紙の製作について滋賀県草津市と共同研究を実施し、現地調査と記録作成を行っている。また選定保存技術については現在選定されている技術と、かつて選定されていた技術の概要を日・英両言語でまとめた『選定保存技術資料集 A Handbook for Selected Conservation Techniques』を刊行した。



獅子神楽調査(北海道)

- 論 文**・久保田裕道：「民俗芸能・祭礼の被災と復興」『東日本大震災 神社・祭り一被災の記録と復興一本編』 pp.184-191 神社新報社 16.7
- 報 告**・Migiwa IMAISHI：「Japanese Shipbuilding Skills and Traditions」, JCH Courier 29, pp.20-21 16.11
・石村智「[資料紹介] 木島正夫による青花紙製作の映像記録」『無形文化遺産研究報告』 11 pp.101-113 17.3
- 発 表**・今石みぎわ：「箕の製作技術と民俗—全国の事例から」国指定重要無形民俗文化財「論田・熊無の藤箕製作技術」周知事業 熊無公民館(富山県氷見市) 16.12.4
- 刊行物**・『選定保存技術資料集 A Handbook for Selected Conservation Techniques』 17.3

研究組織 ○飯島満、久保田裕道、石村智、菊池理予、今石みぎわ(以上、無形文化遺産部)、齊藤裕嗣、菊池健策(以上、客員研究員)、江村知子(文化遺産国際協力センター)、早川典子(保存科学研究センター)